

『中辺分別論』 「真実品」 における勝義解釈

早 島 慧

キーワード：『中辺分別論』、二諦説、三性説、涅槃、四種清浄法

0. はじめに

言説（＝世俗）に依拠しなければ、勝義は示されない。

勝義に依拠しなければⁱ、涅槃は証得されないⁱⁱ。

これは中観学派の始祖龍樹（Nāgārjuna）による『根本中論頌（*Mūlamadhyamaka-kārikā*：MMK）』第 XXIV 章「観四諦品（*Āryasatyaparīkṣa*）」第10偈である。ここで龍樹は、言説（＝世俗）によって勝義が示され、その勝義によって涅槃が証得されることを述べていると考えられる。これに対して、瑜伽行唯識学派の論書、『中辺分別論（*Madhyāntavibhāga* [-*bhāṣya*]：MAV[Bh]）』第 III 章「真実品（*Tattvapariccheda*）」において、「勝義＝涅槃」と説かれる。先の MMK-XXIV における勝義と涅槃との関係は、勝義と涅槃が異なることを示唆しており、少なくとも「勝義＝涅槃」とは言及していない。

そして、管見の限り他の瑜伽行唯識学派の文献にはこの様な勝義解釈はみられず、両論における勝義と涅槃との関係の差異は、中観学派と瑜伽行唯識学派の勝義解釈の差異を示すのではなく、MAVBh-III における勝義解釈の特殊性を示すのである。従って、本稿では「勝義＝涅槃」という、MAVBh-III における勝義解釈の特徴を中心に MAVBh-III における勝義を考察する。結論から述べると、MAVBh-III は、独自の円成実性解釈によって「勝義＝涅槃」と解釈するのである。

1. 『中辺分別論』における勝義解釈

MAVBh-III は勝義を次の様に解釈するⁱⁱⁱ。

一方、勝義は一つによって〔知られるべきである〕。MAV-III k.10d
勝義諦は円成実性、ただ一つによって知られるべきである。では、それは
どのように勝義であるのか。

実に、対象と体得と行為として、勝義は三種であると考えられる。k.11ab
[Tp] 対象としての勝義は真如である。勝れた〔出世間〕智の対象である
ので、

[Kdh] 体得としての勝義は涅槃である。勝れた目的であるので、

[Bv] 行為としての勝義は道である。それは勝義（目的、対象）を有する
ので、

MAVBh は円成実性によってのみ勝義は知られるとし、勝義を真如、涅槃、道の三種であると説く。そして、この三種の勝義は順次、「勝れた出世間智の対象」という Tatpuruṣa (Tp) 解釈、「勝れた目的」という Karmadhāraya (Kdh) 解釈、「勝義を有するもの」という Bahuvrīhi (Bv) 解釈によって導きだされる。ここでは明確に「勝義＝涅槃」と示される。

この「勝義＝涅槃」という MAVBh-III の勝義解釈の特徴を考察することが本稿の主題であるが、これについては後述することとし、勝義解釈の別の特徴をまず指摘する。安慧 (Sthiramati) による MAVBh の復註『中辺分別論釈疏 (Madhyāntavibhāga-ṭīkā : MAVṬ)』は「勝義を有するもの」という Bv 解釈の勝義を次の様に註釈する^{iv}。

行為としての勝義は道である。何故か、それは勝れた義（目的、対象）を有するので。義とは、対象 (viśaya) 或いは目的 (prayojana) である。対象とは真如であり、目的とは涅槃である。

MAVṬは Bv 解釈の勝義には「目的としての涅槃を有する」と「対象としての真如を有する」という二種の理解があると註釈する。さらに

Tp 解釈において、真如が出世間智（＝無分別智）の対象とされていることから、直接、出世間智（＝無分別智）が勝義であるとは言及されないものの、Bv 解釈において、「勝義＝出世間智（＝無分別智）」が含意されていると言える。

つまり、MAVṬに從えば MAVBh は勝義を「涅槃とそれを目的とする道」、「真如とそれを対象とする智慧」という二重の枠組みで捉えるのである。他の瑜伽行唯識学派の論書においては、「真如とそれを対象とする智慧」という枠組みのみで勝義を捉える傾向にあり^{vi}、「涅槃とそれを目的とする道」という枠組みで勝義を捉える点は、他の瑜伽行唯識学派の論書と比較しても異質な解釈と言える。

さらに、paramārtha の Kdh 解釈における「artha」の内容は、他の文献では必ずしも明確ではない。MAVṬが Kdh 解釈における「artha」を「目的 (prayojana)」と直接言及する点は注目すべきであり、この点は、MAVṬが「涅槃とそれを目的とする道」という特徴的な勝義解釈を強調していると考えられるであろう。

以上指摘した様に、MAVBh における勝義は「真如とそれを対象とする智慧」と「涅槃とそれを目的とする道」という二重の枠組みによる独自の解釈がなされており、それに伴って独自の複合語解釈がなされるのである。

2. 『中辺分別論』における二種の円成実性解釈

既に指摘したように、MAVṬに從えば MAVBh における勝義解釈の特徴は、勝義を「真如とそれを対象とする智慧」という枠組みのみではなく、「涅槃とそれを目的とする道」という枠組みでも捉える点にあると言える。では、何故に MAVBh は涅槃、道を勝義として解釈したのであるのか。実際、MAVBh においても、「何故に無為と、有為とが共に円成実性（＝勝義）と呼ばれるのか」と対論者によって問題とされており、これに対する答弁として、MAV-III k.11を引用し「無変異と無顛倒の完成として二であるから」と答える。

しかしながら、MAVBh はこの「無変異と無顛倒の完成として」につ

いて、特に詳しい註釈を加えておらず、詳細に理解することはできない。従って、MAVṬの註釈をもとに考察することとしたい^{iv}。MAVṬはまず、対論者の反論における「無為」とは涅槃であり「有為」とは道であると註釈する。MAVBhの文脈上「無為」とは涅槃と真如の両者を指すと考えられ、さらにMAVṬ自身もそれに続く箇所では「無為とは涅槃と真如とである」と註釈しているにも関わらず、最初に「無為＝涅槃」、「有為＝道」と述べているのは、先の「涅槃とそれを目的とする道」という枠組みで捉えるというMAVBhの勝義解釈の特徴をMAVṬが問題としたからに他ならない。

そして、MAVṬは対論者の反論を二つに分けて註釈する。対論者の反論を要約すると次の様になる。

[反論 1] 勝義諦は円成実性であるが、道が円成実性であるのは不合理である。

道には前後の部分があるので円成実性ではなく、従って勝義でもない。

[反論 2] 真如は円成実性であるが、涅槃と道とが円成実性であるのは不合理である。

円成実性とは「依他起性において所取と能取の二相が存在しないこと^v」であり、真如はその様であるが、涅槃と道はその様ではない。従って、涅槃と道とは円成実性ではなく、勝義でもない。

MAVṬにおける、この両反論に対する答弁は共通して「無変異と無顛倒の完成として二であるから」であるが、[反論 1]に対する答弁箇所では何も註釈しておらず、[反論 2]に対する答弁箇所では詳細に註釈している。[反論 1]では、有為である道が円成実性であることは不合理であるとされ、これを受けて[反論 2]では無為である涅槃も円成実性であることは不合理であるとされる^{ix}。

この[反論 2]に対する答弁において、MAVṬは円成実性とは「依他起性において所取と能取の二相が存在しないこと」と認めた上で、

「しかし、二（所取・能取）が存在しないことは円成実性に他ならないと言うように、それ（〔依他起性において〕所取・能取が存在しないこと）より他のものが円成実性であることを否定するのではない。それ故に、それより他のものも円成実性である。」と述べ、「依他起性において所取と能取の二相が存在しないこと」は確かに円成実性であるが、そのみが円成実性なのではなく、別の解釈の円成実性があることを示唆する。そして、円成実性の別の解釈として「無変異と無顛倒の完成として二つ（涅槃・道）もまた『円成実性である』と結び付けられる」と述べるのである。

つまり、「真如＝円成実性（勝義）」は「依他起性において所取と能取の二相が存在しないこと」という円成実性解釈から導き出されるが、そのみが円成実性なのではなく、無変異と無顛倒の完成としての円成実性解釈によって、「涅槃・道＝円成実性（勝義）」と考えられるのである。MAVṬは、この点を強調して「別々の意図に基づいて有為と無為のいずれも円成実性である」とも述べている。

MAVBh-Iにおいて、円成実性は「所取と能取が存在しないこと」とされており^x、両解釈の関係については言及されないものの、二種の解釈ともにMAVBhにおいて確認される。従って、MAVṬを参照するとMAVBhには上述の二種の円成実性解釈があり^{xi}、後者の解釈が、涅槃と道もまた勝義であるというMAVBh-IIIの特殊な勝義解釈の根底にあると考えられるのである。

3. 無変異と無顛倒の完成としての円成実性解釈

前節において指摘した様に、MAVBhの円成実性解釈には、「依他起性において所取と能取の二相が存在しないこと」という解釈と、無変異と無顛倒の完成としての解釈の二種があり、後者の解釈に基づいて涅槃と道が勝義であるとされる。そこで、本節では無変異と無顛倒の完成としての解釈を中心に考察していく。

ところで、無著造『撰大乘論 (Mahāyānasamgraha : MSg)』において、円成実性は「遍計所執が永久に存在しないこと」と説かれるが^{xii}、

「四種清浄法によって知るべきである」とも説かれる。四種清浄法とは、『阿毘達磨大乘經 (Abhidharmamahāyāna-sūtra)』³⁴ に説かれる、一切の清浄法を自性清浄、無垢清浄、道清浄、所縁清浄の四種に分けて示すものである。以下が、MSgにおける『阿毘達磨大乘經』の引用箇所である³⁵。

円成実性は如何に知るべきであるのか、といえば、四種清浄法が説かれたことによって知るべきである。四種清浄法のうち、

[a] 自性清浄とは、つまり真如、空性、實際、無相、勝義であり、法界もまたそうである。

[b] 無垢清浄とは、つまりまさにそれが一切の障害を離れていることである。

[c] それを体得する道清浄とは、つまり一切の菩提分法と〔六〕波羅蜜等である。

[d] それを生じさせる為の所縁清浄とは、つまり大乘の勝れた教法である。何故ならば、それは清浄の因である故に遍計所執ではない。

〔また、それは〕法界等流である故に依他起でもない。

これらの四種によって一切の清浄法はまとめられている。これについて〔『阿毘達磨大乘經』の〕偈頌がある。

生起について幻等が説かれた。遍計所執によって存在しないことが説かれた。一方、四種清浄によって円成実〔性〕は説かれる。

〔四種〕清浄とは、自性〔清浄〕、無垢〔清浄〕、道〔清浄〕、所縁〔清浄〕である。何故ならば、清浄なる諸法は四種に包摂されるからである。

MSgに対する世親の註釈、『撰大乘論積 (Mahāyānasamgraha-bhāṣya : MṣgBh)』はこの四種清浄法に対して「前の二つ (自性清浄・無垢清浄) は無変異の完成として円成実〔性〕であり、後の〔二つ (道清浄・所縁清浄)〕は無顛倒の完成として〔円成実性〕である」と註釈する³⁶。内容から考えて、この註釈は先の MAV-III k.11cd, 「無変異と無顛倒の完成として」を意識したものと考えられる。そして、MSgには無変異と無顛倒の完成としての円成実性解釈が確認されないことから、MSgBh は

「四種清浄法に基づく円成実性解釈」に、MAV にみられた「無変異と無顛倒の完成として」という偈頌の内容を導入し、結びつけたと考えられる。

既出の様に、MAVBh おいて「無変異と無顛倒の完成として」についての詳しい註釈はなされない。しかしながら、伝承に従い MAVBh と MSgBh の著者を共に世親とするならば、MAVBh においても、「無変異と無顛倒の完成としての円成実性解釈」と「四種清浄法に基づく円成実性解釈」とが結びついていた可能性は否定できない。実際、MAVṬ は三性を理解すべき理由を述べるに際して、MSg と同じ『阿毘達磨大乘經』の偈頌を引用し、円成実性は四種清浄法によって示されると述べている⁹⁴。

MAVṬ における四種清浄法の説明は MSg におけるものと同趣旨であり、MSgBh が MAVṬ に先行することから、直接の言及はないものの、MAVṬ もまた「無変異と無顛倒の完成としての解釈」と「四種清浄法に基づく解釈」とを結びつけて円成実性を解釈していると考えられる。さらに、袴谷 [1976] で言及されるように、MAVBh-III の勝義、円成実性解釈とこの四種清浄法とは内容上も対応関係が見いだされる。詳細については氏の論文に譲るが、両者の対応関係を整理すると次のようになる。

四種清浄法	円成実性、勝義
[a] 自性清浄 ⁹⁴ (真如等)	: 真如
[b] 無垢清浄 (無垢なる真如等)	: 涅槃 (=無垢なる真如 ⁹⁵)
[c] 道清浄 (菩提分法等)	: 道
[d] 所縁清浄 (法界等流の教等)	: 教説 (=顕示としての世俗 ⁹⁶)

内容上、両者は対応関係にあり、MAVBh と同じ著者によると考えられる MSgBh において、「無変異と無顛倒の完成としての解釈」と「四種清浄法に基づく解釈」とが結びついていること、さらに、MAVṬ が両解釈に言及していることから、MAVBh においてもまた直接の言及はないものの両解釈は関連していると考えられる。よって、「涅槃・道=円

成実性（勝義）」の根拠である、無変異と無顛倒の完成としての解釈は、この四種清浄法に基づく解釈と関連した円成実性解釈ということとなる。

つまり、MAVBh の円成実性解釈は、「依他起性において所取と能取が存在しないこと」という解釈のみではなく、四種清浄法と関連した、無変異と無顛倒の完成としての解釈の二種の解釈があり、後者の解釈に基づいて、「涅槃・道＝円成実性（勝義）」が導き出されるのである。

以上考察してきたように MAVBh-III において、勝義が「真如とそれを対象とする智慧」という枠組みのみではなく、「涅槃とそれを目的とする道」という枠組みでも捉えられるのは、勝義である円成実性が、「依他起性において所取と能取が存在しないこと」のみとして解釈されるのではなく、四種清浄法と関連した、無変異と無顛倒の完成としても解釈されることに由来するのである。

4. 四種清浄法に基づいた円成実性解釈

前節において、「涅槃と道が円成実性、勝義であることは不合理である」という反論に対する MAVT の答弁を通して、四種清浄法と関連した、無変異と無顛倒の完成としての円成実性解釈によって、涅槃と道が円成実性、そして勝義と解釈されることを確認した。本節では、四種清浄法に基づいた円成実性解釈の内容を考察する。

既に述べたが、MAVBh-III の勝義解釈は四種清浄法と対応関係にあり、[a] 自性清浄と真如、[b] 無垢清浄と涅槃、[c] 道清浄と道が対応する。そして四種清浄法の構造は、[d] 法界等流の経等、所縁清浄によって道が生じ、[c] その道、道清浄によって [a]・[b] 真如・空性等、自性清浄・無垢清浄が体得されるというものである。この構造は、本来同一のレベルにない四種の清浄法を「教説→道→（有垢・無垢）真如」という形にまとめたものであり、構造内部にレベルの相違があることから階層的、重層的な構造であると考えられる。さらにこれと対応する形で「道と涅槃」、「無分別智と真如」という、同一のレベルにない、修行道における過程と結果が一つのものによって包

撰されることによって、円成実性、勝義もまた階層的、重層的な構造を持つと考えられる³⁸。

また注目すべきは、四種清浄法に基づいた円成実性解釈によって、円成実性の内容が一方で豊かになり、もう一方では自性清浄・無垢清浄という概念が導入される点である。既に指摘したように MAV の段階では四種清浄法は確認されず、MSgBh 以降に、無変異と無顛倒の完成としての解釈が四種清浄法に基づいた解釈と結びつく。真如の有垢、無垢という区別は如来蔵思想を想起させるものであり、この四種清浄法に基づいた解釈が導入されることによって、円成実性、勝義の内容は階層的、重層的構造を有した豊かなものになるが、その一方で如来蔵思想を想起させる概念が導入されるのである。

5. おわりに

以上考察したように MAVBh-III にみられる「勝義＝涅槃」という特殊な解釈は無変異と無顛倒の完成としての円成実性解釈に由来する。MAVBh-III は、勝義を「涅槃とそれを目的とする道」、「真如とそれを対象とする智慧」という二重の枠組みで捉える。そして、勝義は円成実性に基づいて説明されるが、円成実性には「依他起性において所取と能取が存在しないこと」という解釈と無変異と無顛倒の完成としての解釈の二種があり、後者の解釈に基づいて、涅槃と道もまた円成実性、勝義であるとされる。後者の解釈の導入が、「勝義＝涅槃」という MAVBh-III の勝義解釈の要因であり、この解釈が MSgBh 以降に四種清浄法に基づいた円成実性解釈と関連することによって、円成実性、勝義の内容が豊かなものとなるが、その一方で自性清浄・無垢清浄という概念が導入されるのである。

諸研究において指摘されるように、龍樹、〈般若経典〉によって説かれた二諦を前提として、三性は成立している。しかしながら、本稿で考察した勝義は、円成実性を前提として説かれている。これは二諦を前提として三性が成立し、その三性に基づいて二諦が再解釈された

ことを意味するであろう。瑜伽行唯識学派において二諦が変遷しているという事実は、瑜伽行唯識学派の思想史のみではなく、中観学派との関係においても重要な意味をもつと思われるが、紙面の都合上別稿に譲ることとしたい。

略号

- AS : *Abhidharmasamuccaya*, ed. by Osamu Hayashima, 『インド大乘仏教瑜伽行唯識学派における聖典継承と教義解釈の研究』(科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), 2003.
- MAV : *Madhyāntavibhāga*, See MAVBh.
- MAVBh : *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*,
ed. by Gajin Nagao, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, 鈴木学術財団, 1964.
ed. by J. Kim, 金 [2008] (pp. 19-65) 所収.
- MAVṬ : *Madhyāntavibhāga-ṭīkā*,
ed. by S. Yamaguchi, *Madhyāntavibhāgaṭīkā*, 破塵閣, 1934.
ed. by R. Pandeya, *Madhyānta-vibhāga-śāstra : Containing the Kārikā-s of Maitreya, Bhāṣya of Vasubandhu and Ṭīkā by Sthiramati*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1971.
ed. by J. Kim, 金 [2008] (pp. 95-240) 所収.
- MSg : *Mahāyāna-saṃgraha*, ed. Gajin Nagao, 長尾 [1982] (pp. (1) - (106)), [1987] (pp. (57) - (126)) 所収.
- MSgBh : *Mahāyāna-saṃgraha-bhāṣya*,
- MMK : *Mūlamadhyamaka-kālikā*, ed. by J. W. de Jong, *Mūlamadhyamakakālikāḥ*, Adyar Library Series 109, 1977.
- PPr : *Prajñāpradīpa*, D 3853, P 5253.
- SAVBh : *Sūtrālaṃkāra-vṛttibhāṣya*, ed. by Osamu Hayashima *Tattva-The VIth Chapter of the Mahāyānasūtrālaṃkāra-*, 『長崎大学・教育社会科学論業叢』32, 1983.
- TJ : *Tarkajvālā*, D3856, P5256.

- TrBh : *Triṃśikānhāṣya*,
 ed. by S. Lévi, *Vijñāptimātrāsiddhi, Deux Traités de Vasubandhu, Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśikā (la Trentaine) avec la commentaire de Sthiramati, Paris, 1925.*
 ed. by H. Buescher, *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya : Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien, 2007.
- VyY : *Vyākhyāyukti*, ed. by T. Horiuchi, 堀内 [2009] 所収.

参 考 文 献

- 大西薫
 [1993] 「勝義の一考察 - 『中論頌』第24章第10偈の anāgamyā について-」, 『哲学』, 45.
- 北野新太郎
 [2012] 『『唯識三十頌』の唯識三性説』, 『南アジア古典学』, 7.
- 片野道雄
 [1975] 『唯識思想の研究 - 無性造「撰大乘論註」所知相章の研究 - 』, 文栄堂.
- 金才権
 [2008] 『『中辺分別論』における三性説の研究』, 龍谷大学博士論文.
- 斎藤明 (SAITO, Akira)
 [1998] "Bhāviveka and the *Madhya (anta) vibhāga/-bhāṣya*", 『印度学仏教学研究』, 46-2.
 [1999] 「バーヴィヴェカの勝義解釈とその思想史的背景」, 『論集』, 9.
- 佐久間秀範
 [2001] 「*Madhyāntavibhāga-tīkā* における転依思想」, 『仏教文化の基調と展開: 石上善応教授古稀記念論文集』, 山喜房仏書林.
 [2004] 「転依における āśraya の語義」, 『インド哲学仏教思想論集: 神子上恵生教授頌寿記念論集』, 永田文昌堂.

高橋壮

[1973] 「龍樹の二諦説」, 『宗教研究』, 215.

長尾雅人

[1947] 「空義より三性説へ」, 『哲学研究』, 22-1. (長尾 [1978] に所収).

[1948] 「中観哲学の根本的立場 (承前)」, 『哲学研究』, 31-11. (長尾 [1978] に所収).

[1968] 「唯識義の基盤としての三性説」, 『鈴木学術財団研究室年報』, 4. (長尾 [1978] に所収).

[1976] 「中辺分別論」, 『大乘仏典15: 世親論集』, 中央公論社.

[1978] 『中観と唯識』, 岩波書店.

[1982] 『撰大乘論 - 和訳と注解 - 上』, 講談社.

[1987] 『撰大乘論 - 和訳と注解 - 下』, 講談社.

袴谷憲昭

[1976 a] 「唯識説における仏の世界 - <四種清浄法>の構造-」, 『駒沢大学仏教学部研究紀要』, 34. (袴谷 [2001] に所収).

[1976 b] 「<清浄法界>考」, 『南都仏教』, 37. (袴谷 [2001] に所収).

[1976 c] 「<三種転依>考」, 『仏教学』, 2. (袴谷 [2001] に所収).

[1980] 「<自性清浄>覚え書」, 『印度学仏教学研究』, 29-1. (袴谷 [2008] に所収).

[2001] 『唯識思想論考』, 大蔵出版.

[2008] 『唯識文献研究』, 大蔵出版.

早島慧

[2011] 「*Prajñāpradīpa* と *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* における勝義解釈」, 『龍谷大学 大学院文学研究科紀要』 33.

[2012] 「『大乘莊嚴經論』 眞実品における勝義解釈 - 「菩薩地」 眞実義品の影響について -」, 『印度学仏教学研究』, 60-2.

[2013] 「複合語解釈からみた勝義 (paramārtha)」, 『仏教学研究年報』, 17.

兵藤一夫

[2010] 『初期唯識思想の研究 - 唯識無境と三性説 -』, 文栄堂.

堀内俊郎

[2009] 『世親の大乗仏説論 – 『釈軌論』第四章を中心に–』, 山喜房佛書林.

[附記] 本小論は平成24年度山内慶華財団の援助による研究成果の一部である.

-
- ⁱ この c 句については、テキスト上の問題が指摘されている。
Cf. 大西 [1993].
- ⁱⁱ MMK, de Jong ed. p. 35.
vyavahāram anāśritya paramārtho na deśyate /
paramārtham anāgamyā nirvāṇaṃ nādhigamyate // MMK-XXIV k.
10 //
- ⁱⁱⁱ MAVBh, Nagao ed. p. 41, Kim ed. p. 36.
paramārtham tu ekataḥ // MAV-III k.10d
paramārthasatyam / ekasmāt pariniṣpannād eva svabhāvād
veditavyam / sa punaḥ katham paramārthaḥ /
artha-prāpti-prapattyā hi paramārthas tridhā mataḥ / k.11ab
[Tp] arthaparamārthas tathatā paramasya jñānasyārtha iti kṛtvā /
[Kdh] prāptiparamārtho nirvāṇaṃ paramo 'rtha iti kṛtvā,
[Bv] pratipattiparamārtho mārgaḥ paramo 'syārtha iti kṛtvā /
- ^{iv} MAVṬ, Yamaguchi ed. p. 126, Pandeya ed. 96, Kim ed. pp. 138-140.
pratipattiparamārtho mārgaḥ / kiṃ kāraṇaṃ paramo 'syārtha iti
kṛtvā / viśayaḥ prayojanaṃ vārthaḥ / viśayas tathatā prayojanaṃ
nirvāṇaṃ /
- ^v ただし、MAVBhにおいて真如を「道の所縁であること (ālambanatva)」とする文脈 (MAVBh, Nagao ed. p. 48, Kim ed. p. 62.) も確認される。しかしながら、MAVBh-III の次の箇所から真如と智慧とが円成実性であることが確認される。

saṃyagjñānasatattvasya, ekenaiva ca saṃgrahaḥ // MAV-III k.13cd
tathatāsaṃyagjñānayoḥ pariniṣpannena svabhāvena saṃgrahaḥ /
正智と、真実を伴うものは、一つのみによって包摂される。

真如と正智とは円成実性によって包摂される。

これに対する MAVṬ の註釈は次である。

MAVṬ, Yamaguchi ed. p. 133, Pandeya ed. 101, Kim ed. p. 156.

samyagjñānasatattvasya 13cd

iti / sadā śobhanam vā tattvaṃ satattvaṃ tathatā / śūnyatālam-
banādvaṃyājñānam tatprṣṭhalabdhasūddhalaukikaṃ ca samyagjñ-
ānam / **tathatāsamyaḡ<41a4>jñānāyor** avikārāvīpariyāsapariniṣpa
tṭyā yathākramaṃ pariniṣpannatvād ekenaiva **pariniṣpanna**
svabhāvena saṅgraha iti /

正智と、真実を伴うもの (3-13c)

とは、常に或いは明浄なる真実が真実を伴うもの、〔つまり〕真如である。空性を所縁とする不二智とその後獲得される清浄世間〔智〕とが正智である。真如と正智とは順次に無変異と無顛倒との完成としての円成実〔性〕であるから、一つの円成実性のみによって包摂される、と。

ここでは真如と正智が無変異と無顛倒との完成としての円成実性と説明されているが、これは後述するように勝義の二種の分類と同様のものであり、真如と智慧との対関係が確認される。この他にも真如と智慧の対関係は散見される。なお、同じく paramārtha の Bv 解釈が確認される PPr, Tj において Bv 解釈の場合の勝義の内容は智慧である。Cf. 抽稿 [2013]

^{vi} AS, Hayashima ed. p. 104, D54a3-4, P62b3-4, T.31 666a28-9.

[Tp] ci'i phyir don dam pa zhes bya zhe na / 'phags pa'i ye shes
dam pa'i spyod yul yin pa'i phyir ro / /

何故真如名爲勝義。最勝聖智所行處故。

[Tp] 何故に〔真如を〕勝義というのかといえ、聖者の勝れた (*parama) 智慧の対象領域 (*gocara) だからである。

VyY, Horiuchi ed. p. 233.

[Tp] dam pa ni ye shes 'jig rten las 'das pa yin te / de'i don
yin pas don dam pa'o / /

勝れたもの（勝, *parama）とは出世間智であり、その対象（義, *artha）であるので勝義（*paramārtha）である。

SAVBh-VI, Hayashima ed. p. 45, D74a3-6, P84a7-b3.

don dam pa'i mtshan nyid du tshigs su bcaḍ pa / zhes bya ba
la / don dam pa rnam pa gnyis te / de bzhin nyid chos kyi
dbyings rnam par dag pa dang gnyis su med pa'i rnam par mi
rtog pa'i ye shes so // de bzhin nyid la ci'i phyir don dam pa
zhes bya zhe na / [Kdh] 'phags pa'i lam bsgoms pa'i 'bras bu
yin pas don zhes bya ba la / chos thams cad [P84b] du gyur
pas dam pa zhes bya'o // [Tp] yang na don zhes bya ba ni yul
la bya ste / rnam par mi rtog pa'i ye shes dam pa'i yul yin pas
don dam pa zhes bya'o //

「勝義の特徴を分析して一偈がある」と言ううち、勝義とは2種であり、真如である清浄法界と不二の無分別智である。何故に真如を勝義というのかといえ、[Kdh] 聖道を修習した結果であるので、「義（*artha）」と言われ、一切法についてはたらいしているので「勝れた（勝, *parama）」と言われる。[Tp] 或いはまた、義（*artha）とは境（*viṣaya）ということであり、勝れたもの（勝, *parama）である無分別智の対象（義, *artha）であるので、「勝義（*paramārtha）」と言うのである。

TrBh, Lévi ed. p. 41, Buescher ed. p. 130.

dharmāṇām paramārthaś ca sa yatas tathatāpi sa iti / [Tp] par-
amaṃ hi lokottraññānaṃ niruttaratvāt tasyārthaḥ paramārthaḥ /
[Kdh] atha vākāśavat sarvatraikarasārthena vaimalyāvīkārārthena
ca pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ paramārtha ucyate /

「それ（円成実性）は諸法の勝義〔無自性〕である。故にそれは真如でもある。」というのは、[Tp] 何故ならば、無上であるので、出世間智は勝れたもの（勝, parama）であり、その（出世間智の）対象（義, artha）が勝義（paramārtha）である。[Kdh] もしくは、虚空の如く、一切處において一味なる義（artha）として、そして無垢無変異なる義（artha）として、円成実性は勝義と言われる。

なお、この様に勝義を「真如とそれを対象とする智慧」という枠組みで捉える傾向は瑜伽行唯識学派以外の文献にも確認される。 Cf. 拙稿 [2013]

^{vii} 以下、本文中における k.11cd に対する MAVṬ の註釈は以下の箇所である。 MAVṬ, Yamaguchi ed. pp. 126-127, Pandeya ed. pp. 96-97, Kim ed. pp. 140-142.

katham asaṃskṛtaṃ nirvāṇākhyam saṃskṛtaṃ ca mārgākhyam pariniṣpannaḥ svabhāva ucyate / paramārthasatyam hi pariniṣpannaḥ svabhāvo nirdiṣṭam / mārgas tu pariniṣpanno 'yogyaḥ / na pūrvāparabhāgābhāva iti kṛtvā / tasmān na mārgaḥ paramārthasatyam na cāpariniṣpanne paramārthasatyasaṃgraha iti / ata āha -

nirvikāraviparyāsapariniṣpattito dvayam // MAV-III k.11cd
iti /

atha vā katham asaṃskṛtaṃ nirvāṇākhyam saṃskṛtaṃ ca mārgākhyam pariniṣpannaḥ svabhāva ucyate / pariniṣpanno hi tathatā / eṣā ca dvayalakṣaṇarahitvatvaṃ paratantrasyeti na nirvāṇamārgayoḥ pariniṣpannatā yujyate / tad idam acodyam yatas tatra dvayābhāvaḥ pariniṣpanna eva / na tu dvayābhāva eva pariniṣpanna iti tadanyapraṭiṣedhaḥ / atas tad anyac ca / nirvikāraviparyāsapariniṣpattito dvayam api pariniṣpanna iti sambadhyate / asaṃskṛtaṃ nirvāṇam tathatā ca / **asaṃskṛtam** अन्यathābhāvād **avikārapariniṣpattiyā pariniṣpannam** / **saṃskṛtaṃ mārgasaṃgrhītam**, nānyatra, **aviparyāsapariniṣpattiyā pariniṣpannam** iti sambadhyate / **katham ity ato** 'bravīt, **punar jñeyavastuny aviparyāsād** iti / yasmān na punar jñeye viparyāsam āpadyate tasmān mārgo 'pi pariniṣpanna ity ataś ca dvayor api saṃskṛtāsaṃskṛtayoḥ pariniṣpannatvaṃ prthag abhiprāyād ity avirodhaḥ //

[反論 1] 「何故に涅槃と呼ばれる**無為**と、道と呼ばれる**有為**が〔共に〕**円成実性**と呼ばれるのか。勝義諦こそ円成実性であると〔汝は〕説く。しかし、道が円成実〔性〕であるのは不合理である。〔道に〕前後の部分が無いことはないからである。それ故に、道は勝義諦でない。そして、

円成実〔性〕でなければ勝義諦に包摂されないのである」というので、
〔答弁1〕それ故に〔次のように〕答える。

無変異と無顛倒の完成として二種がある。 (3-11cd)

と。

〔反論2〕或いは「何故に涅槃と呼ばれる**無為**と、道と呼ばれる**有為**が〔共に〕**円成実性**と呼ばれるのか。円成実〔性〕こそ真如である。そして、それ（真如）は依他起〔性〕が〔所取と能取の〕二相を欠いていることであるから、涅槃と道が円成実性であるのは不合理である。」

〔答弁2〕このことは非難に当たらない。何故ならば、それ（依他起性）において、二（所取・能取）が存在しないことは円成実〔性〕に他ならないのである。しかし、二（所取・能取）が存在しないことは円成実〔性〕に他ならないと言うように、それ（依他起性において所取・能取が存在しないこと）より他のもの〔が円成実性であること〕を否定するのではない。それ故に、それ（依他起性において所取・能取が存在しないこと）より他のものも〔円成実性〕である。〔つまり、〕**無変異と無顛倒の完成として二つ（涅槃・道）**もまた円成実〔性〕であると結び付けられる。無為とは涅槃と真如とである。無為は変異がないので、無変異の完成としての円成実〔性〕である。有為とは道〔諦〕によって包摂される〔有為〕のみのことであって、他に包摂される〔有為〕ではなく、無顛倒の完成として円成実〔性〕であると結び付けられる。何故かというので、答える。さらに知られるべき事物について無顛倒であるから、知られるべきものについて顛倒に至らないから、道も円成実〔性〕である。従って、また別々の意図に基づいて有為と無為いずれも円成実〔性〕であるから矛盾しない。

- MAV†の当該箇所において、円成実性ではなく、真如が「依他起性において所取と能取の二相が存在しないこと」とされている。しかしながら、これは次の MAVBh-I k.5をうけてのものであると考えられる。

MAVBh, Nagao ed. p. 19.

abhūtaparikalpamātre sati yathā trayāṇāṃ svabhāvānāṃ saṃgraho bhavati /

kalpitaḥ paratantraś ca pariniṣpanna eva ca /

arthād abhūtakalpāc ca dvayābhāvāc ca deśtaḥ // MAV-I k.5

arthaḥ parikalpitaḥ svabhāvaḥ / abhūtaparikalpaḥ paratantraḥ
svabhāvaḥ / grāhyagrāhakābhāvaḥ pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ /
虚妄分別のみが存在するのであれば、如何にして三種の自性を包摂する
のか。

対象として、虚妄分別として、二が存在しないこととして、
遍計所執〔性〕、依他起〔性〕、円成実〔性〕がまさに説かれたのである。
対象が遍計所執性である。虚妄分別が依他起性である。所取と能取が存
在しないことが円成実性である。

さらに、MAVṬもまた答弁において、「円成実性は依他起性において所取
と能取の二相が存在しないこと」と述べていることから、当該箇所は、真
如は「依他起性において所取と能取の二相が存在しないこと」であるので
円成実性であるが、その様ではない涅槃・道は円成実性ではないという文
脈と理解され、この様に要約した。

- ^x [反論 1] と [反論 2] に対する答弁は共通して「無変異と無顛倒の完成
として二であるから」であり、[反論 2] に対する答弁の内容が実質的に
[反論 1] に対する答弁の内容を兼ねていると考えられるが、両答弁にお
ける「二 (dvaya)」の内容は異なっている。[反論 1] に対する答弁にお
ける「二」は「無変異と無顛倒の二種」であり、[反論 2] に対する答弁
における「二」は「涅槃と道の二つ」である。MAVBhにおける「二」の
内容は文脈上、「無変異と無顛倒の二種」と考えられ、MAVṬにおける
「涅槃と道の二つ」という解釈はMAVṬの解釈と言わざるを得ない。しか
しながら、本文中において指摘した様に、「勝義＝涅槃、道」とする
MAVBhの勝義解釈は、他の文献と比べ異質であり、MAVṬはこの点を
強調したのであって、MAVṬがMAVBhの意図に沿わない註釈をなした
と考えるべきではないであろう。

^x 註 viii 参照。

^{xi} 北野 [2012 : p. 198] は本稿とは別の観点、識論の観点から円成実性に二
つの意味があることを指摘する。

^{xii} MSg-II 15c, Nagao ed. p. (74).

^{xiii} 『阿毘達磨大乘經』は本論が紹介するMAVṬの他、『撰大乘論』、『唯識三
十論』、『阿毘達磨集論』など複数の瑜伽行唯識学派の論書に教証として引用

される。しかし、Skt 原本が現存しないのみならず、Tib 訳、Chi 訳などいずれの原語にも翻訳された形跡はなく、その全貌は知られない。(Cf. 長尾 [1982] pp. 28-33.)

^{xii} MSg-II 25, Nagao ed. pp. (86)-(87).

yongs su grub pa'i ngo bo nyid ji ltar rig par bya zhe na / rnam
par byang ba'i chos rnam pa bzhi bstan pas rig par bya ste /
rnam par byang ba'i chos rnam pa bzhi la /

[a] rang bzhin gyis rnam par byang ba ni 'di lta ste / de bzhin
nyid dang / stong pa nyid dang / yang dag pa'i mtha' dang /
mtshan ma med pa dang / don dag pa ste / chos kyi dbyings
kyang de yin no //

[b] dri ma med par rnam par byang ba ni 'di lta ste / de nyid
sgrib pa thams cad dang mi ldan pa'o //

[c] de thob pa'i lam rnam par byang ba ni 'di lta ste / byang
chub kyi phyogs dang mthun pa'i chos thams cad dang / pha
rol tu phyin pa la sogs pa'o //

[d] de bskyed pa'i phyir dmigs pa rnam par byang ba ni 'di lta
ste / theg pa chen po'i dam pa'i chos bstan pa ste / 'di ltar de
ni rnam par byang ba'i rgyu yin pa'i phyir kun tu brtags pa
ma yin no // chos kyi dbyings rnam par dag pa'i rgyu mthun
pa yin pas gzhan gyi dbang ma yin no //

rnam pa bzhi po 'di dag gis rnam par byang ba'i chos thams
cad bsdus pa yin no // 'dir tshigs su bcad pa /

**byung rten sgyu ma la sogs bstan // brtags la brten nas med
pa bstan //**

**rnam par dag pa bzhi brten nas // yongs su grub pa bstan pa
yin //**

**dag pa de ni rang bzhin dang // dri ma med dang lam dang
dmigs //**

**rnam par dag pa'i chos kyi rnams // rnam pa bzhi pos bsdus
pa yin //**

^{xiii} MSgBh, D151a6-7, P180b6-7, T1597 344a16-17.

de la dang po gnyis ni mi 'gyur bar yongs su grub pa nyid kyi
yongs su grub pa'o // phyi ma ni phyin ci ma log par yongs su
grub pa yin no //

於中初二無有變異。圓成實故名圓成實。後之二種無有顛倒。圓成實故名
圓成實。

* Tib 訳では "yongs su grub pa" であるが, Chi 訳が「圓成實故」である
ことから梵文を MAV と同じ "pariniṣpattitaḥ" と想定し, 「完成として」
と訳した。

^{xi} MAVṬ, Yamaguchi ed. p. 112, Pandeya ed. p. 85, Kim ed. p. 102,
D Bi243a7-243b7, P Tshi 83b6-84a8.

evaṃ hy uktam abhidharmasūtragāthādvaye

**māyādideśanā bhūte kalpitān nāstideśanā / caturvidhaviśuddhes
tu pariniṣpannadeśanā //**

**śuddhiḥ prakṛtivaimalyaṃ ālambanaṃ ca mārgatā / viśuddhānāṃ
hi dharmānāṃ caturvidhagr̥hītatvam //**

[… rnam par dag pa rnam pa bzhi la ltos nas yongs su grub
par bstan to // rnam par dag pa rnam pa bzhi la

[a] rang bzhin gyis rnam par dag pa ni dri ma dang bcas pa'i
dus kyi de bzhin nyid la sogs pa'o //

[b] dri ma med pas rnam par dag pa ni de dag nyid dri ma
med pa'i dus na'o //

[c] stong pa nyid la sogs pa 'thob pa'i lam rnam par dag pa ni
byang chub kyi phyogs la sogs pa'o //

[d] lam skyed pa'i phyir dmigs pa rnam par dag pa ni chos kyi
dbyings kyi rgyu mthun pa bstan pa'i chos mdo'i sde la sogs pa
ste / de la brten nas lam skye ba'i phyir ro //]

実に次の様に『阿毘達磨大乘経』の二偈において説かれる,

生起について幻等が説かれた, 遍計所執によって存在しないことが説
かれた。一方, 四種清浄によって円成実は説かれる。

〔四種〕清浄とは, 自性〔清浄〕, 無垢〔清浄〕, 道〔清浄〕, 所縁〔清浄〕
である。何故ならば, 清浄なる諸法は四種に包摂されるからである。

[… 四種清浄に基づいて円成実を説く、四種清浄のうち。
 [a] 自性清浄とは、雑染を伴っている時の真如等である。
 [b] 無垢清浄とは、まさにそれら（真如等）が無垢なる時のものである。
 [c] 空性等を体得する道清浄とは、菩提分〔法〕等である。
 [d] 道を生ぜしめるための所縁清浄とは、法界等流の経等である。それ（経等）に依拠して道が生じる故に。]

* [] 内は現存する Skt 写本には見られない。

- vii この自性清浄を袴谷氏は<如来蔵>として理解し、四種清浄法と如来蔵思想との関連について言及するが本稿では如来蔵思想との関連についての詳細な考察は行わない。
- viii MAVṬは次の様に涅槃を註釈することから、この様な対応関係になると考えられる。

MAVṬ, Yamaguchi ed. p. 125, Pandeya ed. p. 96, Kim ed. p. 138.

prāptiparamārtho nirvāṇaṃ, ekāntanirmalatathatāśrayaparāvṛttī-lakṣaṇam /

体得としての勝義は涅槃である。〔涅槃は〕絶対的に無垢なる真如である所依の転換を特徴とする。

なお、この註釈からも分かる様に、MAVṬにおけるこの有垢と無垢との区別、自性清浄・無垢清浄は転依思想と関連する。佐久間〔2001〕によって MAVṬにおける転依思想は詳細に検討されており、氏は「(1) は MS の思想に則ったものであり、後二者は MAVT が "bodhi" 等の特徴付けという形で、これまでの<転依思想>の二つの視点として流れてきたものを整理し、<転依>ということをも "tathatā" 等本性清浄なものと同対立する概念としてとして定着させたと考えられるのである。さてその場合に MAVṬ は MS のシステムを踏襲しながら、MS の<転依思想>の最大の特徴である <二分依他起>の思想を持たないのである。」(p. 127, 下線部は本稿著者による。)と述べている。本稿において指摘した様に、MAVBh には二種の円成実性解釈が確認されるわけだが、そのうちの「依他起性において所取と能取が存在しないこと」という解釈は転依思想と結びつくものであるが、無

変異と無顛倒の完成としての解釈は本来的に転依思想と結びつくものとは考えられない。後者の解釈はMSgBh以降に四種清浄法と結びつけられ、MAV†に至って転依思想と結びついたらと予想される。氏が指摘する〈二分依他起〉の思想を持たない転依思想は、後者の円成実性と関連するものと考えられるが、紙面の都合上この点は如来蔵的思想との関連と合わせて別稿にて論じたい。

- ^{ix} 本稿では、MAVBh-IIIにおける勝義解釈を考察の中心とするため、世俗については特に言及しないが、MAVBhは世俗を三性それぞれによって解釈しており、そのうちの円成実性としての世俗、顕示としての世俗が[d]所縁清浄の内容と対応する。Cf. 袴谷 [1976b], 拙稿 [2011]
- ^x 四種清浄法の構造は、同一のレベルにない四種が並列ではなく直列的に挙げられている点から階層的・重層的と考えられるが、袴谷 [1976b : p. 30] が指摘するように、[b]無垢清浄なる法界から等流した教説として[d]所縁清浄を考えれば、[b]無垢清浄→[d]所縁清浄→[c]道清浄→[b]無垢清浄という円環的構造と捉えることもできよう。

ただし、内容上四種清浄法と円成実性との対応関係は認められるが、四種清浄法の構造全てが円成実性、勝義の内容について適応されるかは検討の余地が残る。

註^{xiii}の註釈にあるように、自性清浄・無垢清浄と対応するかたちで、真如・涅槃には有垢と無垢という区別がなされている。袴谷 [1976b : p. 37] は「すべてを包含する〈本性清浄〉の中で、無自覚的な主体が自覚の方向に転じ、〈所縁清浄〉→〈道清浄〉→〈無垢清浄〉と結果として〈転依〉を果す仏の構造…」と述べており、この構造を円成実性、勝義に適応すると「すべてを包含する真如の中で、教説→道→涅槃に至る」という構造となる。特に、涅槃が真如に包含される点は今後検討の余地がある。本文で指摘した様に、円成実性には「依他起性において所取と能取が存在しないこと」という解釈と、四種清浄法と関連した、無変異と無顛倒の完成としての解釈の二種の解釈があり、真如が円成実性であることは前者の解釈に基づく。従って、四種清浄法に基づいた円成実性解釈のみによってMAVBh-IIIの勝義を解釈すべきではなく、再検討を要するであろう。